

2008 年度 学科教育点検・評価 (FD) 報告書

学科における教育点検・評価について

学校教育法第 109 条に基づき、本学においては平成 13 年度より教育研究センターを中心として自己点検・自己評価を実施しており、その結果を自主的に学内外に公開してきました。平成 18 年度には「大阪電気通信大学 自己評価報告書」を作成して、日本高等教育評価機構の評価を受け、その結果、同機構が定める大学評価基準を満たしているとの認定を受けました。本報告書につきましては、すでに本学のホームページにて公開しているところです。

本学における全学的な自己点検・自己評価としましては、教育研究センターが中心となって行っている、教育改革の具体的な検討・策定、授業アンケートの実施、各教員の授業改善プランの作成支援、年数回の F D/SD 研修会の開催が中心です。さらに、教育研究センターでは、各学科で実施している教育点検・評価についての報告書を取りまとめ公開することとしました。今回初めてのことであり、報告書の様式は必ずしも統一化されていませんが、今後書式を統一してさらに充実してゆく予定にしています。

本学の教育改革を行うにあたり、社会の求めるものは何か、学生の求めるものは何かを考え、大学自らが組み立てて実行し、責任を持って教育を行うため、教育の原点を見つめ、さらなる教育の質向上のために、自己点検・評価の努力を続けてまいります。

教育研究センター長
大野 宣人

工学部 人間科学研究センター

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

総合科目に関するガイダンスにおいて総合科目 C 群しおりを用い、全学生に説明している。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

担当教員による A 群懇話会や日本語上達法総括会議、B 群担当者会議を開催し、情報交換を行い、教育改善授業点検を行っている。

工学部 数理科学教育研究センター

数理科学教育研究センター(ASセンター)は理工系の学部・学科において、共通基礎専門科目のうち、数学科目と物理・力学科目を担当している。数学関係科目としては、基礎解析・演習、微積分1・演習、微積分2・演習、微積分3、多変数の微積分、線形代数1、線形代数2、応用解析、確率・統計がある。また、物理・力学関係科目としては、物理学1・演習、力学1・演習、基礎力学、力学1基礎・演習、物理学1、物理学1基礎、物理学2、力学2、基礎物理学、物理学・実験、熱学、現代物理学入門がある。

このうち、数学関係科目は学部・学科によらないほぼ統一的な科目配置を行っているが、物理関係科目は学部・学科の特色に応じた科目配置になっている。これは、理工系の学部・学科に共通な基礎数学の習得を目指していることと、専門科目とのつながりを考慮した物理・力学の学習を目指していることによる。これらの科目群は、本来的には、工学部・情報通信工学部などの工学系学部の共通科目として設置されている科目であるが、四条畷の学部・学科に対しても個々の学科の要望により上記科目の内その一部を提供している。

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

A. 数学関係科目

本学数学教育科目における第1の目的は、専門科目を修得するために必要な数学的表現を理解し定理や公式を運用出来るようにすることである。特に理工系の学生が学ぶべき数学の基礎的事項である微分積分学や線形代数学は完成度の高い、整備されたものであるから、これらを習得させることは、各学科の専門における物理学および工学系科目の履修・修得に供することにつながり、重要な目標となる。さらに、2年次で開講している「応用解析」「微積分3」「確率・統計」などはより直接的に専門科目と関わっていることは言うまでもない。

第2の目的は、数学教員免許取得希望者や卒業研究において数学を希望する学生、あるいはより高度な数学を必要とする大学院進学希望者に対し、それぞれの目的に応じて数学の諸分野の知識を身に付けさせることである。

第3の目的は、間接的なものであるが、数学が本来的にもっている論理的整合性や合理性に慣れ親しませることである。このことは、単に手段としての数学知識を習得するためだけでなく、数学的なものの考え方を身に付けることにより、広くこの世界を理解し、社会生活を送るための重要な糧につながる。

上記の目標に従い、初年次生に提供される微積分関係科目(基礎解析・演習, 微積分1・演習, 微積分2・演習)と線形代数関係科目(線形代数1, 線形代数2)を特に重要度の高い科目と位置づけている。すなわち、従来のようにいきなり微積分から始めるのではなく、入学してくる学生に応じて、三角関数や指数・対数関数の理解を十分に行ってから微積分の修得を目指すシステムを取り入れている(基礎解析・演習)。さらに、微積分1・演習においても上記基本関数の復習を行ってから、関数の極限計算, 導関数の計算へと進む。このことにより、微積分1・演習においては、通例不定積分の計算までが目標となる。したがって、微積分2・演習(あるいはダイジェスト版である多変数の微積分)では、1変数の積分を復習しながら多変数の微積分に入ることになっている。

また、線形代数においては、いきなり概念的な項目から始めるのではなく、線形代数1では(行列の基本変形や行列式の計算など)計算方法の習得をメインにしたシラバスになっている。これにより、線形代数の基本的な目標である線形変換や固有値・固有ベクトル・行列の対角化(線形代数2)の習得にスムーズに入れるよう工夫している。

B. 力学・物理学関係科目

力学・物理学関連の基礎専門科目の目標は、物理学の基礎について正確な知識を受け、日常の現象に対して物理的な見方を養い、関連する専門科目の学習への意欲と能力を育てることである。

ますます顕著になってきている新入生の学力レベルの格差への対策として、「力学」「物理学」において導入された習熟度別クラスによる講義・演習も今年度で9年目を迎えている。この間学力レベルに格差のある学生に対する教育の実践に努め、ある程度の教育効果を得ることができた。現在のカリキュラムが導入されたのは2006年度である。旧カリキュラム(2000年度～2005年度)から新カリキュラム(2006年度)への改訂に至る詳細は「2005-2006年度 教育研究センター年次報告」(資料3)に述べられているので、ここでは概略のみ述べる。

2006年度のカリキュラムの特徴は、それまで各学科に配置された1年次前期・後期の力学・物理学科目の基本コースは全て共通であったが、これを学科の特徴を生かしたコースに分けたこと、2年次前期にさらに進んだ内容(アドバンス)の講義を用意したことである。これは、これまでの基礎専門科目はいわゆる古典物理学の範囲に限られており、現代物理学に関する内容を教授する機会は全くなかったが、現代物理学(量子論・相対論を含む)は最先端科学の基礎であり、本来工学部在学中にどこかの講義で扱うべき項目であるという考えに基づいている。学科、コースに纏めたカリキュラムを以下の表に示す。

表 2006-2009年度カリキュラム

| | 1年前期 | 1年後期 | 2年前期 |
|-----|---------------------------|-----------------|--------------------|
| EGF | ★物理学1・演習[2コマ連続] 物理学・実験 | ★物理学2 物理学・実験 | EG 現代物理学入門 物理学3 |
| JH | ★力学1・演習[2コマ連続] 物理学・実験 | 力学2 ★基礎物理学 | J 熱学 |
| ZN | ★力学1・演習[2コマ連続] 物理学・実験 | ★基礎物理学 N 力学2 | N 熱学 |
| P | 基礎力学 | 基礎物理学 | |
| L | 力学1・演習[2コマ連続] | 力学2 物理学基礎 | 物理学2 |
| Y | 力学1基礎・演習[2コマ連続] | | |
| S | 力学1・演習[2コマ連続] | | |

★印は習熟度別クラス編成科目

「物理学・実験」:「物理学・実験」は、物理現象との接触を通して原理の理解を深めながら、工学諸分野を専攻するのに不可欠な基本的実験操作や測定値処理法の習得を目的としており、工学部(EGHJFN(Zを除く))および情報通信工学部のF学科では必修科目である。Z学科も必修ではないが、ほとんどの学生が受講している。また、誰が読んでもわかるレポートの作成も重要な課題の一つである。力学、物性、熱学、光学に関する実験課題が10テーマ以上用意されている。2007年度までは最初の3週は座学、基本的測定器の実習およびグラフの書き方などにあて、残り12週で10テーマの実験課題を実施してきた。2008年度はレポートの書き方の指導を徹底するために、最初の3週が終了し、実際の実験が始まるわけであるが、最初の3テーマはそれぞれレポート指導日とその実験テーマの直後の週に配置した。また、2009年度はさらにレポート負担の軽減及びレポート指導を徹底するために、最初の4回を座学に、さらに全ての実験テーマにレポート指導日を配置することにして進めている。

習熟度別クラス分けは、2006年度のカリキュラム改訂を機に、入学時の新入生全員を対象にした「数学プレイズメント・テスト」の結果と物理の履修アンケートに基づいたクラス分け(初歩クラス、基礎クラス、標準クラス)に変更した。物理の問題に関わる「プレイズメント・テスト」が実施できれば、分かりやすいのであるが、現状での新入生の状況を考えると不可能である。2008年度に新設された医療福祉工学部健康スポーツ科学科は初年度はL学科と合併でクラス分けをしていたが、2009年度からは各々別クラスに変更した。

2. 教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

A. 数学関係科目

現在、入学してくる学生の基礎学力の不足と多様化が問題になっている。最近の指導要領の改訂により益々この傾向が強くなっている。このことは本学に限らず全国的な現象として知られているところである。この問題に対応するため、当センターにおいても2000年度から取り組んできた。数学においては、微積関係科目と線形代数の科目を1年次の重要科目ととらえ、特に多くの学生が苦手とする解析関係科目についてコース制を導入した。従来からある微積分の科目に加え、新たに基礎解析・演習を1年次の前期に設け後期から微積分の科目を修得するコースを新たに設けた。これにより、高校生の段階で、特に指数・対数関数や三角関数の理解や運用が不十分な学生に対応できることになった。

4月はじめに行うプレイスメントテストによって、いくつかの学科をグループとしてクラス分けを行い、上記の基礎解析・演習からスタートするクラスと従来からの微積分1・演習からスタートするクラスが平行して走ることになった。（資料：2007年度クラス分け結果（数学）および2008年度クラス分け結果（数学））

複数学科を3～4つのクラスに分けて、学生の習熟度に応じて基礎解析・演習クラスと微積分1・演習クラスが平行に置かれている。各クラスの教授陣は連絡を密にして、授業の進度、講義や演習の工夫などの情報交換を行っている。さらに、クラスによる不公平感がないよう合格率に大きな差が生じないように努めている。2007年度および2008年度における、1年次前期科目の基礎解析・演習や微積分1・演習の合格率はおよそ80%～85%、線形代数1の合格者は85%～90%になっている。1年次後期科目についても合格率は（若干低くなるが）ほぼ同様な数値になっている。

さらに1年次の後期には基礎解析・演習および線形代数1の再履修クラスを設けて初年次生に手厚く対応している。この再履修クラスにおいてはテーマを絞り、演習をより多く取り入れて学生の達成感を重視している。また、少人数クラスの特典を活かして出来る限り個別対応に努めている。

数学関係科目の教授陣は20数名であるが、このうち非常勤講師が約15名である。日常的には電子メールで情報交換を行い、特に習得の難しい学生への対応などについて意見交換している。また、学期末には全員が集まり当該年度の授業の問題点やシラバス、翌年度の授業について議論し、さらに評価の統一性も図っている。

B. 物理・力学関係科目

1. 習熟度別クラスによる「力学1・演習」「物理学1・演習」

機械系コースの「力学1・演習」(標準クラス)では、高校時代に物理をある程度学んできているため、従来のスタイルで講義を行うことが可能であった。しかし、「円運動」や「単振動」の理解は、標準クラスの学生においても困難で、ほとんどのクラスでは「単振動」は後期の「基礎物理学」にゆだねている。さらに、「力学1・演習」(初歩クラス)では、物理を学ぶ以前に、数学的な取り扱いができない学生が急増していることが目立っている。文字式の扱い、1次方程式、連立方程式、関数とグラフ(1次関数、2次関数)など、質点の運動を理解するために必要な数学的な知識を復習しながら進めていかねばならない状況である。

電気・物質系コースの「物理学1・演習」、「物理学2」(振動・波動)はこれまでの「力学1・演習」「力学2」「基礎物理学」によるコースから、力学と同じレベルで振動・波動にも演習を行い、この習熟度を高められるように新設されたものである。力学・物理学関連の全時間数を減らして学生の負担を軽減するとともに、専門分野で必要になる基礎的な内容に重点を置いて教授することが狙いである。しかし、振動・波動の理解は容易ではなく、効果的な教授法の模索が続けられている。

このように習熟度別によるクラス編成では、クラス内の学力レベルの格差が抑えられているので、少なくとも学生の状況に合わせた授業運営が可能であり、授業に対する学生の満足度を高めるとともに、講義を進めやすい環境を教員側に提供して精神的な負担を軽減させている。定期試験を受験した80%近くの学生が単位を取得できている。「高校1年の数学」がある程度マスターできていれば、2コマ連続の授業でゆっくりと演習を進める現在の授業で力学の基礎を習得することは可能なようである。しかし、学生の学力レベルを授業に対する理解度の現状から判断すると、進級するごとに学力レベルの格差が拡大していくことは避けられないと思われる。幅広く柔軟な教育システムのもと、多様な教育観を持って運営していくことが必要であろう。

2. 「物理学・実験」

「物理学・実験」については、2006年度から、工学部各学科の定員が10～20名減少した関係で、定員の大きい学科も2クラスに分けず1クラスで指導する体制に変更した。指導する教員の数も学科の定員に合わせて減らし、5名ないし4名体制にした。この年は、実験は終了したがレポートを出さない学生が急増した年でもあった。このため、レポートをより書きやすくする必要に迫られ、実施する実験テーマを新規テーマに代えたり、実験指導書の全面書き換えを行った。2006年度は最初の1テーマだけ実験日の翌週をレポート指導日に当て、さらに、最後の実験日を実験予備日としてレポート未提出者の救済に当てた。レポート指導日の有効性が認められることから、2007年度はレポート指導日を最初の3回の実験テーマ各々について実施することにした。(1)レポートに対する負担の軽減とレポート指導の徹底、

(2) これまで、講義時間中に実験レポートを書く学生が多くて授業に差し障りがあるという批判があったが、これらに答えるものであること、が期待された。さらにもう一步進めて、2009年度は、全テーマについて指導日をもうけることにした。各人が履修するテーマ数に関しては、2007年度は8テーマ、2009年度は6テーマになったが、レポート指導の充実、測定器の実習、グラフの書き方など特別な時間を設け十分時間をかけて指導することができるようになった。

3. 再履修クラス

教員及び受講する学生の努力にもかかわらず、合格ラインに達しない学生が出ることはやむをえない。高校時代物理をほとんど学んだことのない学生にとって、繰り返し時間をかけて勉強することは必要であろう。すなわち、1年次前期に開講されており、基幹科目でもある「力学1・演習」「物理学1・演習」においては、1年次後期に「(再)力学1・演習」「(再)物理学1・演習」を配置し、 Semester制の完全実施によって、前期に単位が取得できなかった学生でも後期の再履修クラスに履修登録をして再度学習できるようにした。2009年度も同様な意図で再履修クラスは開講させている。再履修クラスを充実させることで、学生が何度でも再履修することができる環境を整え、合格ラインを下げることなく教育できることを目指している。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

A. 数学関係科目

以前に行っていたオフィスアワーは、実効性が見いだせなかったもので、今のところ行っていない。数学教員の多くは寝屋川学舎R号館1階に研究室をもっているため、質問等はそこに行くよう学生に周知している。また、教員は時間の許す限り学生の質問に応じるよう、お互いに申し合わせている。実際に、ほぼ毎日どこかの研究室で学生が質問している光景が見られている。

別に、毎週月曜と火曜に開かれているコラボカフェをアナウンスして、教員に質問しにくいときは、これを利用するよう促している。

B. 物理・力学関係科目

特になし。

4. 卒業研究指導について

工学部・情報通信工学部の各学科より、学生の希望に応じて卒業研究指導を行っている。受け入れについては各教員に任されているが、卒研内容のアナウンスや卒研発表等の行事は当センターがとりまとめて行っている。

5. その他、特記事項（学科独自の教育など）など

学部・学科の共通基礎専門科目を担当する側からいくつかの問題点を指摘しておきたい。1つは、工学系の学生が身に付けておくべきミニマムスタンダードを統一的に教授するためにさまざまな工夫を行っているが、この数年は各学科の独自性が優先されつつあり、たとえば線形代数1を配置しながらそれにつづく線形代数2は配置されないなど当センターの意図が十分に活かされないカリキュラムが見受けられる。学部・学科の共通基礎専門科目に対する全学的な位置づけ、制度化が望まれる。

第2の問題は、四條畷で開講しているいくつかの科目についてである。上記のような我々の意図とは別に、提供している科目を学科個々の思惑で切り売りのように配置されている側面が見受けられる。たとえば、基礎解析・演習の再履修クラスが設けられていないことや、学科にとってふさわしくない（大半の学生にとって習得困難な）数学科目を配置している場面などが見受けられる。四條畷の学部・学科と共通基礎専門科目を提供する組織との調整機関の設置が望まれる。

「力学・物理学合同運営会議」について：

2006年度からのカリキュラム導入を機に、力学運営会議及び物理学運営会議を合同で開催するようになった。現在の構成メンバーは AS(7)、H(1)、J(2)、Z(1)の8名である。年3回(2月、5月、9月)の定例会議では、講義内容、クラス編成、合格ライン、と成績評価、予算申請、TA 採用など、企画・立案・決定がおこなわれ、実質的な運営が行われている。例えば、どちらのコースも共通のシラバスのもとで、同一の教科書を使い、それぞれの担当クラスの習熟度に合わせて授業運営と成績評価を行うことにし、評価基準は成績と小テストを含む演習で40%、定期試験で60%とした。各クラスには TA(ティーチング・アシスタント)を配属し、演習指導が行き届くようにした。その結果、「力学1・演習」「物理学1・演習」においては、試験のやり方も工夫することより、受験した学生の80%以上が合格率している。なお、これらの成果は、運営会議メンバーの各教員による基礎専門科目に対する高い認識と、学生に適した授業を実現するための創意工夫によって支えられているものであり、運営会議を構成・運営している意義はきわめて大きい。

工学部 英語教育センター

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

- ・教育目標：辞書があれば英文マニュアルや専門領域の文献を理解できる読解能力の養成を目指す。
- ・1年生を対象に学力別クラス分けを図る。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価（平均値, 成績分布, 合格率など）について

- ・プレイスメントテストによるクラス分けに応じて統一教材を指定することにより、英語教育センターとしての教育目標に統合性を持たせた。
- ・自主学習型授業科目「英語コミュニケーション（目的別学習コース）」運営実施。

3. 学生指導（履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など）について

- ・履修指導：1年生入学時の英語科目に関するオリエンテーションとプレイスメントテストの実施。
 - ：2年次配当科目「英語コミュニケーション1・2」の科目履修に関するガイダンス実施。
- ・英語学習支援室での学習相談の実施。

4. その他, 特記事項（学科独自の教育など）など

- ・院生を対象とする学会等の口頭発表のための事前指導の実施。（担当：特任教員）
- ・シェリダン大学研修学生を対象とする英語学習事前指導の実施。（担当：特任教員）
- ・UBC英語研修学生を対象とする英語学習事前指導の実施。（担当：特任教員）
- ・両キャンパスにおいてランチタイム英会話教室の実施。（担当：特任教員）
- ・テクノフェアでの「DS de イングリッシュ」実施。

工学部 電子工学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

H19年度からH20年度は特に変更した点は無い。H21年度シラバスは電気電子工学科に名称変更したため新たに新学科名称のためのシラバスを作成するに当たり、15週の講義項目記載に変更した。が、逆に項目の列挙になっただけであり、数回の講義で学ぶべきあるいは到達すべき目標が書きにくくなり、適切な変更であったかは少し疑問が残る。

2. 教育改善や授業点検、成績評価（平均値、成績分布、合格率など）について

低学年科目（電気数学・演習、基礎電気回路、電気回路2）については、ほぼ毎回、演習を実施しているが、効果の程は評価できていない。1年次科目（前記前者2科目）の演習の解答と返却は別途オフィスアワーを設け、TAによる指導も含めて行っている。基礎ゼミナールとの連携で理解度向上を模索している。

高学年科目（デジタル電子回路、LSI設計）についても、授業回数の半分については授業中演習を実施し、その講義の理解を助ける試みをしているが、合格率として改善効果は見られなかった。最終講義に過去問等の総合演習時間を設けても、他の授業のレポート等の作成をやっており効果が得られてない。

基本的に、教える内容を易しくすることはやめて、時間をかける、講義方法を変えるなどで対処をしていきたい。

必須科目である制御工学1では、昨年度学生より、単位取得者が大幅に減少した。問題レベルをラプラス変換の基礎と伝達関数の安定性についての基本的問題に限定したが、正規受講生の約4割しか単位取得をしていない。これら学生は平均3日講義を休んでおり、その改善が重要な課題である。未修得者はラプラス変換とは何かについても理解しておらず、問題の単純化はあまり効果がないようである。なお、最履修生は出席率50%以下であるような学生を除き、大半が単位取得をしている。正規生と心構えが違っていたようである。

3. 学生指導（履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など）について

基礎ゼミナールの時間の出席状況をみて、基礎ゼミナールの時間に指導している。極端に状況の悪い学生には、携帯電話メール等で問い合わせてはいる。

また、1年生前期担当科目については、適宜出席状況を学科内教員に提供するよう努めている。

1年生の基礎ゼミは担任学生の半数近くがこの科目が選択となったため、ほとんど出席していない。このため、これら学生に対する配慮は行き届かないという意見も多い。

平成21年度は基礎ゼミが電気電子工学基礎として専門科目に配置され、必修科目としたため、この授業で履修相談等の指導ができると期待している。

4. 卒業研究指導について

卒業研究については担当教員それぞれによって取り組み方は異なっており、意見を記述する。

卒研生の一部が不登校になる場合が多くなっている。実家から登校する学生には親との電話を通じて何とか呼び出している。ある卒研生については、おそらく、30回以上母親と電話連絡し、他教員の協力もあり、何とか卒研発表にこぎ着けた。ただし、下宿生で、本人が携帯電話に出ず、両親もあまり連絡がつかない場合、対応の方法がほとんどない。

前期は週2回のゼミ、後期も週2回のゼミを行っているが、特に前期は就職活動や6月から始まる教育実習などで、全員揃ってのゼミを行うことが難しいのが現状である。このため研究室全体のチームワーク作りは夏休みに実施してきたゼミ旅行で2～3泊の合宿で何となくまとまり、協力関係ができています。また、友電会主催のソフトボール大会に向けての練習などを通じてより一層のチームワークができ、後期からの卒業研究の進捗に好結果をもたらしている。このようなチームワーク作りをしてきた結果、これまで卒業研究で不合格者は0である。

実験研究を基本にして一人一人の個性を活かすことを念頭に置いている。課題決定には本人と直接面談して本人の授業や生活習慣を話し合いながら決定する。週1回半日のゼミ発表会を行っており、全員が質問やコメントなどを行うように指導して全体

との強調や助け合いの精神を養い、自らの成長を自覚させている。実験は原則として毎日従事して報告させている。不十分や不満奥なデータは破棄させており研究への真摯な態度を養うように指導している。それぞれが助け合って実験研究をするようになってくる。

5. その他、特記事項（学科独自の教育など）など

平成21年度から電子工学科は電気電子工学科に名称変更を行ったが、単なる名称変更だけでなく、カリキュラムも名称に伴って電気系科目を追加し、現代社会で問題となっているエネルギー、環境に配慮した科目構成にした。

さらに、産学連携講座として産業界の第一線の技術者による、現場の生きた技術内容を講義してもらうことにより、工学に対する興味付けおよび技術の習得を期待している。

産学連携講座の成果の確認には2～3年後になるが、学科としてその結果について注目している。

工学部 応用化学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

平成 20 年度までは、応用化学科のカリキュラムには前身であった電子材料工学科の教育内容をかなり残していたが、高校生(受験生)に対する当学科への魅力を増強させるため平成 21 年度からカリキュラム改訂を行った。特にマテリアル(新科目:ナノ化学、超分子化学、錯体化学)、暮らしと化学(新科目:食品化学、化学と生活、化学と安全、化学と産業、化学と倫理)、バイオ(新科目:生体機能化学、バイオ材料)などの分野で化学系科目を充実させた。

シラバスについても全面的に見直しを行い、改訂した。新しい科目だけでなく、これまであった科目についても全員でシラバスの確認を行った。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

新しい試みとして、平成 20 年4月に淡路島で合宿研修を行い新入生同士、教員や院生等との交流を図った。また、この合宿研修で任天堂 DS を配布し、使用方法を教えると同時に交流にも利用した。

上記の任天堂 DS を基礎ゼミナール1・2でも活用した。具体的には「漢検 DS2」や「常識力トレーニング」というソフトを使い、基礎ゼミナールの一部で利用し漢字力や常識力の強化に努めるとともに、数人で対戦するなどして新入生相互の交流を図った。

アンケート調査については応用化学科のほとんどの教員が実施した。1回目と2回目のアンケート実施期間が短かったため、2回目の実施をした教員は少なかった。また、一部の教員は学生からのコメントに対し返事を書いて、Web で公開した。平成 21 年度はアンケート実施と学生からのコメントに対する返事の Web 公開の割合を高めたい。

成績評価については、時々、学科会議で各科目の状況(成績分布、合格率など)を話し合った。

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

年度初めの履修登録の前に、各学年で集合させ、特別な科目(プレインターンシップ、インターンシップ、特別ゼミナール、プレゼミナールなど)について注意事項を説明した。

学科会議で、しばしば、学生指導の話題を出し、グループ担任の学生の状況を詳しく話し合った。これにより、問題のある学生の状況は全員がその情報を共有できたのではないかと思う。また、一方で良くできる学生に対するケアも必要との意見が出され、平成 21 年度はオフィスアワーを設け、

様々な学生に対応したい。

4. 卒業研究指導について

各研究室で、輪読会・検討会など、週2回のゼミナールを実施した。夏休み前後にはいくつかの研究室が集まって中間発表会を行い、学科会議でその様子を報告している。これによって、卒業研究の進捗状況が把握でき、また、担当教員だけでなく他の教員も加わることによって学生の意識や意欲を高めることができている。2月中旬には学科全体で卒業研究発表会を行い、そこでの議論やコメントを卒業論文に反映させる様に指導している。

5. その他、特記事項（学科独自の教育など）など

資格支援講座として、通常の講義とは別にボランティアで公害防止管理者(水質関係)試験の支援講座を開設した(教育研究 D 予算を利用:平成 20 年度は榎本、湯口、川口が担当)。応用化学科の2、3年生を中心に36名が受講し、その内30名が国家試験を受験した。平成 20 年度は科目合格者が10名前後(推定)という結果にとどまったが、平成 21 年度も実施するので、継続して受講する学生の中から国家試験合格者が出ることを期待している。

応用化学科では化学薬品や高圧ガスなどを使用するので、リスク管理が大切である。平成 20 年度には、各研究室の薬品リストを作成し、担当教員が試薬の種類と量を把握・管理するようにした。また、事務局長と相談し、化学実験室および研究室の不要な化学薬品の処理および薬品棚の更新を行った。さらに、初めての試みとして、これまでに各研究室で経験した事故や事故寸前の出来事(ヒヤリ・ハット)を作成し情報を共有した。できれば平成 21 年度にこの結果と安全に関する注意をまとめ冊子にしたいと考えている。

その他、応用化学科では、高大連携、テクノフェア、オープンキャンパスなどに積極的に協力した。また、平成 21 年度はサイエンスパートナーシップも実施する予定である。高校訪問も行い、広報活動にも取り組んでいる。

工学部 電子機械工学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

電子機械工学科では、メカトロニクスの主要素である「機械」「電気・電子」「計測・制御」「情報・コンピュータ」の4分野をバランスよく学び、ハードウェアとソフトウェアの両面から広い工学的視野を持った技術者を育成する。シラバスに関しては授業内容 15 回分を具体的に記述し、評価方法も明記している。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価（平均値, 成績分布, 合格率など）について

各教員に担当授業を割り振る際に、できるだけ負担が均等になるように行なっている。授業点検に関しては学生に対する授業アンケートを行い、授業改善に努めている。成績評価に関しては、期末のテストのみではなく、複数回の中間テストや出席など総合的に評価を行なっている。

3. 学生指導（履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など）について

1年生から3年生は、各学年 10 名程度の学生を各教員の担任とし、年 2 回の成績配布時に履修指導や教育相談を行なっている。また、1年時における「基礎ゼミナール1, 2」においてはグループ担任が各学生を担当し、学生との意思の疎通をはかっている。就職指導に関しては、4年および3年後期からは各卒研室にわかれ卒研およびプレゼミナールに出席することにより、卒研担当の教員が個別に行なっている。

4. 卒業研究指導について

3年生は後期から各卒研室に配属となり、早くから卒業研究に接することにより教育・研究に対する動機付けを行なっている。また、卒研生は1年間の成果を①予稿、②卒研発表、③卒業論文として発表およびまとめを行なっている。

5. その他, 特記事項（学科独自の教育など）など

演習・実験科目において、図面やレポートのチェックを厳しく行ない、再提出させることにより理解が深まるように努めている。

工学部 機械工学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

講義に対応した演習を重視している。基礎力の充実を図る目的で演習科目を多く設けている。それらの科目では学生自ら課題に取り組み確実に理解させることを目指している。

工業力学および演習

機械設計製図演習

熱工学 熱工学演習

流体工学 流体工学演習

機械力学 機械力学演習

機械運動学 機械運動学演習

制御工学 制御工学演習

機械要素設計演習 機械要素設計

CAD 製図 CAD 実習

シラバスでは目標を明確にするよう努力している。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価 (平均値, 成績分布, 合格率など) について

各教員が学生に理解しやすい授業を心掛けている。小試験やレポートを課す科目も多い。出席しはじめに取り組む学生が不合格になることはあまりない。科目によっては、再評価を行っている。学生にやり直しの機会を与え、内容の理解を深めている。

3. 学生指導 (履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など) について

グループ担任との面接を通して行っている。

3月には各学年のオリエンテーションを行い、履修指導や生活指導を行っている。

4. 卒業研究指導について

学生の希望を最大限配慮し、研究室への配属を行っている。その様な学生に対して、各教員が熱心に研究指導を行っている。

5. その他, 特記事項 (学科独自の教育など) など

- 1.機械設計技術を認定する機械設計技術者 3 級資格試験の支援 (3年生以上)。
- 2.CAD 利用技術者試験の合格支援 社会で最も利用されている3次元 CAD システム (CATIA) を 60 台導入 (近隣の大学では最大規模) し, 充実した 3 次元 CAD 教育環境。

工学部 基礎理工学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

各学年で、実験・ゼミを充実させ、きめ細かい指導ができるようにしている。とくに、2年生向けの「基礎理工ゼミナール1、2」では、学生各自の基礎的な数学と物理学について習熟度と興味にあわせクラスを編成し、基礎学力の強化と個性を伸ばす教育を試みている。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価（平均値, 成績分布, 合格率など）について

- ・1年生向けの基礎理工学入門に関して、できるだけ担当以外の教員も出席するようにしている。また、2、3年生のボランティアが手伝うこともある。
- ・プレースメントテストや入試成績などによる習熟度に基づいて、クラス編成を行い、グループ担任・副担任らが担当し、担当者グループ会議を開きながら進め、状況の把握、成績の基準などを相談しながら進めている。(基礎ゼミナール1・2)
- ・これまでの成績や履修状況に基づいて、クラス編成を行い、成績の評価など担当者間で相談を行いながら運営をしている。(基礎理工学ゼミ1・2)
- ・担当者会議を適宜開き、状況を把握しながら進めている。(物理学と先端技術、応用サイエンス実験)
- ・3年次の専門科目におけるコース(数理モデリングコース、科学計測コース)において、関連する科目間で連携して進めている。(数学:数理モデリング、数理モデリングゼミナール、シミュレーション基礎など、科学計測:計測・データ処理1・2、シミュレーション工学、応用サイエンス実験、科学計測ゼミナールなど)

3. 学生指導（履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など）について

- ・学科会議のたびに、欠席など気になる学生についての情報交換を行う。必要なら担任・副担任などが学生に連絡を取る。
- ・新年度に向けた学年別の学科ガイダンスを3月に行い、カリキュラムの基本的な考え方を改めて説明するとともに、履修モデルや履修上の注意を知らせている。また、基礎理工学科の1週間が分かるように(教職科目との関連も分かるように)、学科の時間割を作成して、学生に配布している。
- ・留年生や単位不足と思われる学生に対して、履修登録や就学上のアドバイスを適宜行っている。

4. 卒業研究指導について

学科としての卒業研究はまだ始まっていない。

5. その他、特記事項（学科独自の教育など）など

- ・新入生に対して、宿泊研修やエッグドロップコンテストなど、単なる歓迎会ではない歓迎行事を行っている。これらには、2・3年生の有志も参加し、手伝ってくれている。
- ・さまざまな企画を通じて、学年間にまたがって学生が交流できるように努めている。
- ・任天堂DSを活用して、自学自習による教育効果をあげる取り組みを進めている。

工学部 環境技術学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

機械工学・電気工学の知識を基礎にし, 環境問題に取り組み解決できる能力を有する技術養成を目標にしている. 環境・機械・電気の分野の知識を習得し, 幅広い工学知識をもち, 問題解決能力をもつことができるよう配慮している.

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

授業アンケートの結果を参考にし, 授業点検を行い授業改善に努めている. 成績評価は, 期末試験以外に, 授業時に随時行う演習問題の評価や出席状況を考慮している.

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

前後期の成績配付時に, 履修指導や教育相談をしている. 学生相談に対しては, クラス担任がクラスの学生の相談に当たり, 必要に応じて学生相談室アドバイザーに相談し, 学科会議にフィードバックし対応している.

4. 卒業研究指導について

平成20年度では, 3年次生が最上学年生であるため卒業研究はまだ実施していない. 3年生後期に配当されている「プレゼミナール」では少人数にグループ分けし, 卒研担当教員が研究内容および卒研テーマを説明し, 卒業研究を行うため必要な基礎教育を行い, 4年次において迅速に卒業研究に着手できることを目指している.

5. その他, 特記事項(学科独自の教育など)など

演習・実験科目に対しては, レポートを厳しくチェックし, 内容を良く理解し書くよう指示している.

また, 環境に関連する各種資格(環境社会検定試験(エコ検定), 気象予報士, CAD利用技者試験, エネルギー管理士など)を修得できるよう支援し, ゼミナールなどを実施している.

6. 添付資料

なし

情報通信工学部 情報工学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

- ① 平成 18年から導入されたカリキュラムで学ぶ学生は、それ以前の学生より2・3年次における履修科目数が少なくなっている傾向が顕著に見られる。
- ② 2・3年次の講義や卒業研究において、学力の低下だけでなく、そもそも下の学年で履修が望ましい科目を履修していないための知識不足が指摘されており、これが支障を来している。

2. 教育改善や授業点検、成績評価(平均値、成績分布、合格率など)について

学科教員は全員責任を持って、真面目に学科学生の教育を行っている。授点検および成績評価の点検を学科では行っておらず、今後の課題である。

3. 学生指導(履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など)について

学生指導をグループ担任と卒業研究教員を中心に普通どおりに行っている。

情報通信工学部 通信工学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

- (1)「教授要目」に週単位の内容明記
- (2)厳選による専門科目数の削減(H18年度からの新カリキュラム以降)

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

- (1) Moodleを用いたEラーニング教材の運用…基礎電気回路、電気回路1・2、情報通信理論1。
- (2) 少人数教育の実施…基礎ゼミナール2→3クラス編成で3名の教員が担当。(基礎ゼミナール1→9グループを9名全員で担当しているが、これに準じた試み。)
- (3) 自作教材による授業…固体電子工学1・2。
- (4)「教授要目の評価欄」に出席、小テスト、中間テスト、期末テストの評価点割合を明記。
- (5)「基礎の内容」と「発展した内容」の明示…「基礎の内容」は合格レベル、「発展した内容」は修得度に応じて点数が高くなることを明言して指導。
2名の教員が実施中。
- (6) 質問しやすい環境づくり…授業の途中で5分間程度の休憩を設け、教員が質問を受けに回る。
1名の教員が実施中。
- (7) ノートチェック…授業終了時に全員のノートをチェックし、日付スタンプを押す。1名が実施中。

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

- (1) オープンラボ…行き易く、何でも相談しやすい場所作り。1名の教員が夕方実施中。

4. 卒業研究指導について

- (1) 学生自身によるテーマ設定…自主性尊重のため。1研究室で実施中。
- (2) 教員の価値観を明確に示す。学生に対して曖昧な態度をとらない。

5. その他, 特記事項 (学科独自の教育など) など

(1) キャリア支援科目を1～3年次に設定 (H18年度からの新カリキュラム以降)

- ・情報通信工学入門(1年次)…将来の活躍分野を含めて、情報通信工学全体の入門。
- ・特別ゼミナール1・2(2年次)…無線従事者関連資格取得のための支援講座。国家試験問題などを用いた授業を行うが、定期試験はなし。資格を取得した場合、程度に応じて単位を認定。
- ・プレインターンシップゼミナール(3年次)…必修科目としているのはF学科のみ。就職、インターンシップのためのマナー教育、準備教育の他、卒業研究室紹介・研究室配属を行う。

情報通信工学部 光・エレクトロニクス学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け，シラバスについて

本学科ではエレクトロニクスをベースとして、その応用として光エレクトロニクスに主眼を置いた教育を行っている。カリキュラムもそれに合致するよう工夫を凝らしている。現状ではいくつかの問題点もあるが、それを改善する(カリキュラム改定など)ことはできないので、現状のカリキュラムの範囲内での改善を行う(シラバスの再検討を含む)必要がある。しかしながら、改善を試みるにしても1年のみであったりするので、実際のところ現状のまま、在籍するすべての学生を無事卒業させることに主眼が移っている。

2. 教育改善や授業点検，成績評価（平均値，成績分布，合格率など）について

既に述べたように、本学科では教育改善を行う時間的な余裕が残されていない。むしろ留年などで残されている学生のレベルを考え、これまで行ってきた内容よりやさしくしたり、成績評価においてもこれまでの基準を下げざるを得ないのが現状である。

授業の開講形態についても、教員の移籍先での負担増を考慮して、平成 21 年度より、1年次配当のすべての科目および2年次配当の科目のいくつかにおいて、他学科との合併講義としている。受講生にとっては、合併となることにより講義内容が従前とは変わるため、負担を強いることになるが、できる限り本学科所属の教員が担当する他学科での科目を対象とするなどの工夫をしている。しかし、平成 22 年度以降においては、他学科に同類の講義がない科目(たとえば光学関係科目)の取り扱いをどうするかが問題となってくると考えている。これについては平成 21 年度に学科内で十分検討をしたいと考えている。

3. 学生指導（履修指導や教育相談，生活相談，就職指導など）について

本学科において、現在最大の課題は留年生に対する指導である。上記のように留年生が履修する科目の一部は、他学科との合併授業となってくる。こうした点も踏まえて、グループ担任が中心となって履修指導を確実にを行い、ちゃんと卒業できるように適宜助言を行い、相談にのることができる体制をとっている。

平成 20 年度においては、精神的な事情により学科全体での卒業研究発表会での発表ができない学生が2名いたが、こうした学生に対しては個別に発表させるなどの対応を行い、卒業研究判定を行った。結果として当該学生を無事送り出すことができた。

4. 卒業研究指導について

卒業研究については、配属された研究室においてゼミを行い、研究室ごとに2回の卒業研究中間報告を課している。そして、最終的には学科全体での卒業研究発表会を行い、卒業論文とあわせて卒研の可否判定を行っている。卒業研究発表会には、それに先立つ卒業論文の提出を義務付けており、発表会において全教員が全卒研究生の卒業論文に目を通してしている。こうした指導により、担当指導教員だけでなく、専門分野が異なる他の教員からも卒業論文に関するコメントを得ることができ、また発表においても卒業論文で述べられていることを、許された時間内に的確にプレゼンテーションできているかなど、きめ細かい指導を行っている。

さらに、発表に問題がある場合には、再発表を課すなど、単に義務として発表さえすればよいという安易な考えにならないよう工夫をしている。

5. その他、特記事項（学科独自の教育など）など

本学科では4年次に選択必修科目を配当している。4年次になると、卒業研究以外の必要単位がそろってくるため、それ以上の知識の習得を目指して授業を受ける学生が極端に少なくなる。こうした状況を勘案して、4年次に選択必修という形で学科教育の総仕上げともいえる先進の講義を配置し、そのいくつかを履修させる工夫をしている。

医療福祉工学部 医療福祉工学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

教育目標は、医用工学系はME1&2 種実力検定試験と臨床工学技士資格取得、医療情報系は医療情報技師、スポーツ科学系は健康運動実践指導者取得など資格取得を目標の1つとして明確化している。

2. 教育改善や授業点検、成績評価(平均値、成績分布、合格率など)について

資格取得率を上げるために年3回程度の学科内の実力試験を行い、資格取得コースとリンクさせている。またe-LearningによりME1&2種実力検定試験過去問題や臨床工学技士国家試験の過去問題を作成し、成績の向上や単位所得に役立てている。また国家試験直前は試験対策ゼミを開講し、合格率100%維持を努力している。(本年の本学の合格率は養成校の中でもトップクラスである。)

3. 学生指導(履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など)について

履修指導や生活指導は1年生と2年生はクラス担任が担当し、3年生はプレゼミとして7月から研究室配属させ研究室単位で行っている。また就職指導は就職への意識を高めるために病院見学や企業見学を開催し、病院の医師や企業の技術者を招き講演会を開催している。

4. 卒業研究指導について

卒業研究指導は3年生前期より指導を行い、12月に卒業研究発表会を全員参加の下に行っている。また卒業論文の提出は2月に行い、その間に発表会の質問事項や改善点への追加研究を行っている。また病院や福祉現場でのデータ収集を行い、学会参加や発表も積極的に行っている。

5. その他、特記事項(学科独自の教育など)など

本学科は実学の重要性を低学年から分かるように病院見学や企業見学を春休みや夏休みに自主的参加の下に行い、概ね好評であり、学生の学習意欲のエンカレッジには極めて有効である。また学生だけの心電図の勉強会が6年の間に先輩から後輩へと指導が受け継がれており、病院就職後にも実践力として評価されている。また同時に縦の学生の人間関係形成にも役に立っている。

る。

医療福祉工学部 理学療法学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

(ア) 教育目標の設定と説明

教育目標の設定については、前年度学科会議において学科における確認を行っている。特に、最終目標である理学療法士国家試験合格レベルへの到達目標を達成する上での進級判定基準、単位認定基準の確認を励行している。

また、各科目の試験問題作成においても各教員の基準を統一するため、問題に国家試験の過去の問題を挿入することなどの取り決めを行っている。

(イ) カリキュラムの位置付け

入学時、新年度開始時におけるオリエンテーション期間に、その学年の各科目の階層性、有機的関連性を説明するばかりでなく、4年間のカリキュラム全体の中での位置づけなどを各学年ごとに説明している。

新入生については、教養科目の位置づけ、専門基礎科目の意義、位置づけを繰り返し説明し、専門性の概要を講義する理学療法概論の講義中にも臨床的事象を例にとり、解剖学、生理学、機能解剖学など同時進行している基礎専門科目の学習内容を具体的に列挙しその関係性を理解させようとしている。

(ウ) シラバス

専門科目については、シラバスに各項目名を明示しても初学者に理解できない専門用語が出る場合、概略のみを示し、講義進行中の学生の反応や理解度を確認しながら進行計画を示す工夫を行っている。

2. 教育改善や授業点検、成績評価(平均値、成績分布、合格率など)について

定期的に、授業内容で、既習の事項の理解がなされていない場合、報告しその原因を分析し、繰り返し講義するなどの対策を講じている。

また、運動学などの専門科目で、領域を分け、運動学1、運動学2と分割している場合、定期試験の合格者や平均点のばらつきが出た場合など、試験のレベル、講義内容のチェックを担当者同士で行っている。

3. 学生指導(履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など)について

学生指導については、国家試験や総合臨床実習などの準備を十分に行えるよう研究室配属を3年時に行い、研究室指導教員が中心となって定期的に個人面談を行っている。1年2

年次に対しては、グループ担任が中心となって、面談を行っているが、教員によっては、担当講義が少ない学年があり、行き届かない面もあり、低学年の講義担当者がグループ担任に関わらず、講義中の態度、挙動などについて問題がありと判断した場合は、学科会議などで逐次報告し担任、主任の対応へと引き継いでいる。その際、必要であれば、主任、担任の複数で学生と保護者に対する面談を行っており、さらには、学生相談室の相談員も交えた面談に至った例もある。

4. 卒業研究指導について

理学療法学科の特徴の一つであるが、業務守備範囲が広く多岐にわたる科目の総合的な理解の促進の為に、卒業研究を行っているが、臨床実習などで行われるケーススタディにもその役割を担わせており、両者が、最終学年の学生にとって過重な負担にならないよう卒業研究のレベルについて高すぎる目標設定にならないよう教員間の連絡を密にし指導している。さらに、最終学年が、総合臨床実習と国家試験準備に忙殺されることを考慮し、研究室配属を実質的に3年次とし卒業研究の作業を3年次でほぼ完了できるようにしている。

5. 特記事項

学科学生全員が理学療法士の国家試験受験資格取得が卒業要件となるため、臨床実習完了が必須条件となる特殊な事情がある。従って、基礎知識、基本的検査・治療技術など一般的知識の底上げに加え、基本的資質の涵養を教育目標の柱に挙げる必要がある。このため、論理的思考能力の習得は勿論のこと、コミュニケーション能力が患者との良好な関係構築の必須条件となる。

医療福祉工学部 健康スポーツ科学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

体育教員免許(中学校, 高等学校), 健康運動指導士, 健康運動実践指導者および体育協会認定アスレチックトレーナーの資格取得を目標としている。

2. 教育改善や授業点検、成績評価(平均値、成績分布、合格率など)について

工学部に設置された学科のため, 卒業後社会的に期待される工学的スキルを身につけるため, 情報処理・コンピュータリテラシー関連, 工学基礎などの分野を積極的にカリキュラムに導入している。資格取得実績については初年度のため今後に期待する。

3. 学生指導(履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など)について

履修指導や生活指導は各学年10名のグループに分割し教員を各グループの担任に割り当てている。各グループ担任は履修指導、成績配布と学習指導、および生活指導を行っている。また父兄などからの依頼に応じ随時教育相談を行っている。就職指導については初年度のため実施していない。

4. その他、特記事項(学科独自の教育など)など

本学科は株式会社コナミスポーツ&ライフ株式会社との提携を行っており、同社が経営するコナミスポーツクラブにおいて実習などを行う予定である。また学科教員とコナミスポーツ&ライフの間で共同研究なども実施している。

総合情報学部 デジタルアート・アニメーション学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

18年度カリキュラムの見直しと改定を目指して学科内にWG「カリキュラム改訂委員会」を設置した。

学生の教育・生活指導に活かすために、新(編)入生対象に授業のことや学生生活あるいは進路等についてのアンケートを実施した。

下記2の「情報共有委員会」の報告を受けて、学科では21年度から本格的にカリキュラムについて検討することとしている。現行カリキュラムは学生にとってわかりにくい面があり、またコンテンツ制作にとってさらに必要な科目があると学科では認識している。

シラバスについては、学生に授業内容がわかりやすく詳しいものにするということで、教員間で確認し、21年度シラバスに反映した。

2. 教育改善や授業点検、成績評価(平均値、成績分布、合格率など)について

学科内にWG「情報共有委員会」を設置した。同委員会の要請により、各教員は全担当科目について授業内容の報告を行った。この調査により、内容的に重複している点や不足の点、科目名と授業内容の矛盾点などが明らかになった。

成績評価や合格率については検討していないので、次年度に検討したい。

3. 学生指導(履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など)について

「ゼミナール入門」(1年次前期)は、学生が学科でどのような学生生活を送っていけばいいのかという指針になるような科目として位置付けている。専任教員がリレー式に講義をし、学生が学科での学習や将来像をイメージしやすいように配慮している。学外でプロのコンテンツ制作者として活躍している教員の講義は学生にとって特に刺激や励みになることを期待している。

学生の生活面についてはグループ担任のまとめ役の教員を決め、その教員に情報が集約されるようにした。また、学生の休学、退学といった問題があった場合には、本人だけではなくできるだけ保護者とも直接または電話で話をするように学科では確認している。精神的な問題を抱えている学生が予想外に多く、情報共有ということを全教員が強く意識している。

就職については、入口科目・出口科目を設定しているが、それにとどまらず日頃から学生の職業意識を育むように教員は努めている。また、進路支援室の有効利用についても指導している。

4. 卒業研究指導について

学科では卒業研究と卒業制作があるが、それぞれの評価基準が明確ではなかったので、検討した。その結果を21年度シラバスに反映することができたが、さらなる検討をしていきたい。

卒業研究・制作の発表会である「なわてん」については、今年度もデジタルゲーム学科と共同で取り組み、成功裏に終えることができた。教員の熱心な指導もあり作品レベルは年々向上してきている。学外での開催も考えるべき時期なのかもしれないが、予算面での苦労が今以上に予想される。卒業研究や卒業制作作品は外部からの評価の対象となり、ひいては学科の評価につながるため、質の向上にさらに学科として取り組んでいく予定である。

5. その他、特記事項(学科独自の教育など)など

21年度から中国江南大学より留学生を2年次に編入生として受け入れるにあたり、デジタルアート・アニメーション学科とデジタルゲーム学科の教員が提携校の江南大学で講義と演習を行った。授業は学生から好評を得たとの報告を得ている。

今年度もシェリダン大学との交換留学を実施したが、同大学へ短期留学した学生達は刺激を受けて帰ってくるので他の学生にもよい影響を与えているようである。

学生とプロのスタッフとの共同制作である「弘恵の道しるべ」全8話がテレビ大阪で放映された。この活動を通じて学生はプロの厳しさを学ぶだけではなく、学習に対する意識も前向きに変わってくるようなので、学科としては今後もこの活動を支援していく予定である。

学外でのインターンシップや学内でのJIAMSとの産学協同のコンテンツ制作により参加学生は力をつけているようであり、就職へつながる可能性も大きいと考えている。

総合情報学部 デジタルゲーム学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け, シラバスについて

2008年度の学科専門科目カリキュラム改訂において、学生の興味関心と学科の人材育成目標との最適化を図ることを目的に、従来の3コース制から新たに6ユニット制へ変更し、学際領域を横断的によりダイナミックに学べる自由度の高いカリキュラムへとアップデートした。具体的には、情報工学系科目群として Science・Development・System の3つのユニット、芸術デザイン系科目群として Art & Design・Graphics の2つのユニット、企画プロデュース系科目群を Entertainment として編成している。

選択肢の増加は学びの自由度が上がる一方で、学生各自のカリキュラム設計を複雑にしてしまう負の要素も併せ持つ。その点を解決するツールとして、履修をサポートするための4年間のカリキュラムリストを制作しガイダンス時に配布している。新カリキュラムへの移行2年目を迎えたが、学生各自の興味領域や志向が、明確に履修科目の選択に現れていることが見て取れる。

1年次生を対象に前期土曜日の集中開講による「大学入門」を総合科目群の中にデジタルアート・アニメーション学科と合同で独自に設定し、大学での学びのシステムやスタイル、またその活用方法について理解を促している。同様に、1年次前期開講の「日本語表現法」においても、環境適応性・自主性・協調性を、自然に身に付けさせることを目的として、自己分析と自分表現を出発点に、グループワークでの企画立案・コンテンツ制作を体験させ、最終的にはプレゼンテーションまでの流れを形成し、学科における学生各自の立ち位置を相互に理解し合う場としても機能している。

これらの科目は、学生相互の人間関係の形成に大きく影響するものであり、初期段階でのドロップアウトを防ぐ効果もあると考えている。

4年間を通して、グループ単位で主体的活動をおこなう授業の組み立てを多く配置し、社会から期待されるコミュニケーション能力、プレゼンテーション能力をはじめとした人間力の育成を意図している。

シラバスの記載に際しては、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

- 科目の目的では、この科目を学んで身につけられること(知識、能力)ができるだけ具体的に分かるように記述している。

- 内容・目標は、実際に行なう内容に即した 15 回の記述を原則としている。
- 評価方法は、評価項目とその重みだけでなく、評価項目の意味するところの説明も記述している。
- 特に第 1 回目の授業ガイダンスにおいて、シラバスの内容を詳細に説明する資料を別途配布し、シラバスの内容が意味するところ、教員の授業観・学生観、授業方法について解説している。また、この科目での学習方法もアドバイスしている。

2. 教育改善や授業点検, 成績評価(平均値, 成績分布, 合格率など)について

成績評価については、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

- シラバスに記載した評価基準を、第 1 回目の授業ガイダンスで説明するとともに、中間テストや、定期試験の前に、それらを再度説明している。また、教育的配慮において、その評価基準を変更する必要がある時は、受講生にあらかじめ授業中に説明し、受講生が不利にならないような、変更にとどめている。

教育改善や授業点検については、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

- 毎回到業終了 10 分前には、その回のまとめを行ない、受講生にラーニングアウトカム(学んだこと)を、各自で整理するよう促している。
- 学生の志向と資質、技術の進展に合わせて、同一科目であっても、毎年、教授内容を柔軟に変更させている。
- 各回の授業概要を、授業開始までにウェブサイト上に公開し、授業終了以降も授業期間中は閲覧・参照できるようにしている。授業概要には、講義の要約や課題内容を記載し、自学のサポートとなるよう配慮している。

3. 学生指導(履修指導や教育相談, 生活相談, 就職指導など)について

新年度を迎える前に、各年次(新 2 年次・新 3 年次・新 4 年次)に対して、それぞれ学科教育内容に関するオリエンテーションを実施し、各年次での教育内容の主要なポイントを解説するとともに、教育目標を再確認することで学科教育に対するモチベーションの維持向上を促している。

また、編入生・転科生などに対しては入学時にほぼ一対一の履修指導を実施し、各自の入学以前の学修状況を鑑み、学科教育にスムーズに浸透していける履修プログラムの設計について指導

している。

学生指導については、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

- 質問や相談に訪れやすいように、授業で適宜アナウンスをしている。また具体的に、教員室のドアをいつも半開き程度にし、学生がのぞきやすい印象を持ってもらえるようにしている。
- プログラミング技術について教える際、できるだけその技術が現場で使われている例を最初に示し、なぜその技術が必要なのかを理解させてから、詳細の説明に移っている。
- デザイン系科目においては、デザイン思考の開発と表現技術の獲得の両面から教育指導にあたり、特に多様な表現形態について視る眼を養うことを意識し、課題作品の講評の際には学生作品1点ずつにコメントを付している。
- 心理的・精神的な問題を抱える学生については、カウンセラーとの密な連携を取って指導にあたっている。
- 就職活動に対するサポート(エントリーシート添削や会社見学の引率など)を実施している。
- 礼節の大切さと実践する気持ちよさを、毎回の授業で体感させることを徹底している。具体的には、授業開始時に大きな声で「おはようございます」と発声し、それに対して学生も「おはようございます」と返す。授業終了時に大きな声で「おつかれさまでした」と言い、それに対して学生も「おつかれさまでした」と返すというものである。
- 協働の精神、個人の社会性の向上、社会への寄与の研究姿勢を持たせ、生の声を直接聞き、変化する社会を表と裏から見る事で、現場意識と政治への関心、実践力をつけることを強く意識している。フィールドで生の実態を掴むと同時に、学術的態度として俯瞰的、普遍的、根源的なものの見方をさせるようにしている。

4. 卒業研究指導について

卒業研究・制作指導については、学科教員個々に以下の配慮がなされている。

- 研究室内でのゼミ以外に、毎月、学外者(他学科、他大学、企業関係者)との研究会を開催し、視点・視座・価値観の多様さが重要であることを意識させている。さらに議事録を書かせ、ドキュメンテーション力を高めている。また、その場で3ヶ月に1回は、研究報告もさせ、プレゼンテーション、コミュニケーション力の実践的能力の育成をしている。
- 定期的に学外者(OB、他大学教員、企業関係者)と合宿ゼミを開催し、集中的な討議の経験をさせている。そこでは、新入社員としてのマナーや基礎知識の訓練もおこなっている。

- 他大学の研究室に見学に出かけ、研究に対する取り組みの姿勢やレベルの参考にさせている。
- 3年次後期の研究室配属決定後、ゼミ所属学生個々が講師となって、各自の興味領域について講演をおこなう課題を課している。ゼミ生相互の個性を理解する一助とするとともに、講演のための資料準備やプレゼンテーションを通して、その後の研究・制作発表への導入としている。
- 4回生時から積極的に学会発表(ゲーム学会、電子情報通信学会、情報処理学会、芸術科学会など)をおこなっている。
- 学外での作品発表(ET2008、なわてふれあい商工まつりなど)をおこなっている。
- 積極的にコンテストやコンペティション(文化庁学生 CG コンテストなど)に応募している。
- 自治体や地域との連携として、寝屋川市まちづくりに関する市民意識調査をゼミで実施するなど、制作・研究テーマとして地域貢献(寝屋川市の防犯、防災、経済活性化策など)を主題にしている。

5. その他, 特記事項(学科独自の教育など)など

学科独自の教育としては、以下の取り組みがあげられる。

- 入学後早期に学生の把握をおこなうことを目的に、新入生の顔写真撮影を実施している。
- ノートパソコン導入教育(5~7コマ)を実施している。学科教材としてのノートパソコンを学生生活に中で有効活用するために、初期段階で集中的なリテラシー教育を実施している。
- 4月から5月の期間は、特に新入学生の動向についての情報交換を、学科会議および学科メーリングリストを通じて頻繁におこなっている。
- 年度当初には学科教育に参画いただいている非常勤講師の方との懇談会を実施し、学科教育目標や科目連携の確認をおこなうとともに、幅広い専門領域を持った教員相互の親睦を深める機会としている。
- TA・SA 講習会を実施している。学外から招聘している演習補助員の方の協力をいただき、大学院・学部の学生の TA・SA としての教育指導力向上を目的に、2008 年度に初めて実施した。今年度は大学院学生数も充実しているので、大学院 2 年次生を中心に自主的な運営をおこなう予定である。
- 5月中旬に新入生歓迎会を実施している。単なる懇親の場としてだけでなく、「日本語教育法」の授業内で形成されたグループごとに、ショートプログラムを企画・実施し、授業との連

動による教育的な側面も加味したイベントとなっている。

- Tokyo Game Show への出展を、学内コンペ形式で展示作品の選考をおこない実施している。授業内でのコンテンツ制作指導を端緒として、授業外においても学生の自主的なグループ編成によるコンテンツ制作に取り組む体制が形成され、授業の枠を超えて学科専門教育の見地から教育効果が非常に高いプログラムであると判断している。
- 総合情報学部としてカナダ・シェリダンカレッジとの短期交換留学制度を実施している。国際コミュニケーション能力の養成という観点で、参加学生の成長は著しいものがあると感じている。
- 中国・江南大学との国際交流協定のもと、デジタルアート・アニメーション学科、デジタルゲーム学科両学科教員の現地での出張講義を実施している。日本語能力を研鑽中の学生が対象であるため、チームティーチングの実施や教材の検証・開発など授業運営の工夫が必要であり、本来の設定目的とは別に教員研修としての機能も併せ持っている。
- 3年次前期開講の「プレゼミ」においては、専任教員の各研究室の研究・制作テーマや指導内容などについて、理解を促すためのプレゼンテーションを実施し、卒業研究・制作への導入として位置付けるとともに、SPI 模擬試験の実施など進路選択の端緒としても捉えて授業運営をおこなっている。
- インターンシッププログラムは、学科設立後3年次を迎えた段階で実施し、これまで継続的に展開している。教員のコネクションを通じた企業開拓や四條畷学務課・進路支援室の協力を得て、一定の企業数を確保して実施している。プログラムを修めた学生は、就業体験を通して協働の精神とコミュニケーション能力の重要性を強く認識し、その後の学生生活を送っている様子がうかがえる。
- オープンキャンパスにおいて、学科学生主導のイベントを企画運営している。在学中に自分の所属する学科を客観的に分析し、学生の目線で学科広報の方向性を具体的に企画するイベントプロデュースを通じて、来訪者に対する学科のアピアランス向上と同時に、学生の専門分野の見地からの教育効果も併せて意図したものである。
- 卒業研究・制作発表会および「なわてん」の実施に際しては、4年次生の研究・作品発表の場として、その準備運営にはゼミに配属された3年次生が、教員の指導のもとあたっている。
- 学科設立当初から、教員相互また学外からの来訪者による授業参観は頻繁におこなわれていたため、授業参観については自由に受け入れる学科の雰囲気形成されている。

総合情報学部 メディアコンピュータシステム学科

1. 教育目標やカリキュラムの位置付け、シラバスについて

教育目標の開示、遵守、指導は JABEE の基準に基づき実施している。

2. 教育改善や授業点検、成績評価(平均値、成績分布、合格率など)について

意見交換程度は学科会議で行っている。平成 21 年度から学科 FD 委員会を置き改善することとなった。

3. 学生指導(履修指導や教育相談、生活相談、就職指導など)について

履修指導や教育相談はしっかりやっているつもりである。生活相談は保護者や本人の申し出があれば随時やっているが、生活面はあくまでも本人、家族の問題であり教員が解決してやれることは少ない。就職指導は、平成 21 年度から就職活動の進捗状況を具体的に学生から聞き指導するなど強化した。

4. 卒業研究指導について

卒業研究は、複数教員で審査するなど評価を厳正に行っている。卒研指導方針、合格条件を内規で定めダブルスタンダードにならないようにしている。

5. その他、特記事項(学科独自の教育など)など

学科、FD 委員長を決め FD 活動を行うこととした。内容は以下の通り。

1. JABEE 研修会および、情報連絡協議会、FD 関係等の研究会に出席する。

2. 以下の事を取り仕切る。

* 定期的に半期末に授業報告会を開く。

* 各学年で数名程度の FD 学生委員を募集し、意見交換会を定期的にやる。

* 外部者の講演、意見交換の場を設ける。

3. FD 活動に対する提案を行う。